
バカと不良の交遊録

ヘタレな道化師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと不良の交遊録

【Nコード】

N1999BA

【作者名】

ヘタレな道化師

【あらすじ】

ある日、Fクラスにやって来た一人の少女：彼女は開口一番こう言った…

「んで？誰から潰してほしい？」

やって来たのは不良少女！？

これはそんな少女と彼女を取り巻く人々との一年間を記録した交遊
録である…

キャラ紹介（前書き）

バカテス二作目です。

相変わらず文章力皆無な駄文ですが、お付き合いいただけたら幸いです。

キャラ紹介

名前 坂上 葵

さかがみ

あおい

性別 女

主人公。

短い金髪と日焼けした肌。鋭い目つきが特徴的な女子高生。

黙ってればそれなりに美少女。

中学生の頃から様々な『伝説』を残していて、高校進学後も不良グループの間でその名を轟かせていたりするちよつとおちゃめな女の子。

『藤ヶ丘学園』所属であったが、不良学生の更正を目的とした『学生救援プロジェクト』のテストケースとして文月学園に送り込まれることになった。

只今絶賛、人間不信中。特に男には嫌悪感MAXといった感じで接する傾向あり。

身体能力はかなりのものだが、頭はあまりよろしくない。

得意科目は現代文、保健体育。苦手科目は理系全般。

好きなものは、アクション映画とレンコンの天ぷら。

嫌いなものは、他人、辛いもの、その他諸々。

『てめえらは…アタシが責任持って絶滅させてやる!』

.....
名前 榎木 希美子

性別 女

悪名高い不良高校『藤ヶ丘学園』の学園長。

文月学園、学園長とは昔からの知り合いであり、犬猿の仲。

『学生救援プロジェクト』の発足者であり、文月学園に主人公を送り込んだ張本人。

いつも微笑みを絶やさない老婦人であるが、「藤ヶ丘の化け狸」の異名で呼ばれるほどの人物。

「目的の為には手段は選ばない」、「今まで何人もの競争相手を裏で潰してきた」等、黒い噂には事欠かない。

好きなものは、刺繍と悪だくみとウイットにとんだ悪口を考えること

嫌いなものは、タコ焼きと文月学園学園長。

『さて、と…どう切り崩しましょうか？　ウフフ』

キャラ紹介（後書き）

とりあえず、キャラの大まかな設定から。

次はプロローグです。

できたら読んでやってくださいませ。

プロローグ（前書き）

というわけでプロローグです。

ちなみに今回、主人公は登場しません。

とりあえずどうぞ

プロローグ

春。

一年の初めの季節…

ここ、文月学園も爽やかな風と共に桜が舞い散り、幻想的な光景を見せている。

それはまるで、これからの一年間の学校生活への期待を胸にした生徒を歓迎しているようであった。

そんな温和な空気が流れている学校…

「学園長！これはどういふことですか！」

そんな空気を薙ぎ払うような破壊的な大声が文月学園学園長室に、響いていた。

「学園長！これはどういうことですか！ご説明頂きたい！」

大声の主…西村教諭こと鉄人…

もとい、鉄人こと西村教諭が趣味のトライアスロンで鍛えた肺活量を駆使した声を響かせていた。

「説明も何も、今言っただまんまのことさね。西村先生」

そんな鉄人の超音波攻撃に顔をしかめながら答えるのは学校の七不思議『学園長室に巣くう妖怪』…

ではなく、文月学園学園長、藤堂カヲル学園長である。

「それでは納得出来ないからお聞きしているのです！どうぞ、私が納得のいくご説明を！」

鉄人は持っていた書類を机に叩きつけた。

書類には細々とした文字とともに、黒いセーラー服を身につけた女子生徒の写真がついていた。

金髪でセーラー服を着た女子生徒は睨みつけるような目つきをカメラに向けている。

そして、書類の上には機械的な文字でこう書いてあった。

『学生救援プロジェクトの概要及び、実施に伴う問題点の把握の為の実験的運用について』

やたら長ったらしい題名のその書類を手にして、学園長は顔をしかめたまま、ため息をついた。

「西村先生…これは決定事項さね。いくらここで騒いでたって覆りやしないよ」

「しかし！」

「文句はアタシじゃなくあの『化け狸』に言っとくれ。そもそもがあの女の提案から始まった計画なんだからね」

「ぐ…それは…」

鉄人は学園長の言葉に怯んだように言葉を詰まらせる。

その様子は生徒から「鬼」とよま呼ばれ恐れられている普段の彼を知る人からすれば驚くべきことである。

彼が怯んだ理由。

それは…

「悪名高き不良高校『藤ヶ丘学園』の学園長… 榎木希美子」

学園長が心底嫌そうにその名前を口にした。

鉄人はその言葉を聞きながら、考える。

榎木希美子…

ここらの学校関係者ならば名前くらいは知っている程には有名な人物。

教育者としても、経営者としての腕も優秀。

今まで様々な学校を奇抜なアイデアと類い稀な行動力で改革、成長

させてきた実績を持つ。

数年前より、近くの高校…俗に『不良グループ』と言われるような生徒ばかりが通う、藤ヶ丘学園の学園長に就任したとは聞いていたが…

「あの狸女がまた妙な提案を出してきてね」

「それが…」

「ああ、そうさ…それが」

学園長は睨むように書類に視線を向ける。

「『学生救援プロジェクト』」

柗木希美子の提案…『学生救援プロジェクト』。

それは、『不良グループの学生の更正とその健全な成長を促すこと』を目的に掲げた計画である。

そして、その方法として希美子が提案したのは…

「『学校同士で生徒を一時的に交換する』…でしたか」

「正確に言うなら『藤ヶ丘学園』と『文月学園』で、さね」

学園長がまたため息をつく。

その言葉に鉄人はまた詰め寄る。

「学園長！何故、そのような提案を了承したのですか！」

「そんな近くで叫ぶんじゃないよ！…アタシだって、好きでこんな提案を呑んだわけじゃないさ」

詰め寄る鉄人の暑苦しさ満点の顔を押し戻しながら学園長は言う。

「狸女はね、この計画をここの高校全てに提案したのさ。しかも、自分の生徒を送る学校の候補としてうちを名指ししてね」

学園長は不愉快さを隠しもせず続ける。

「他の高校にとっては、うちにあの『藤ヶ丘』の生徒が来ることによって、うちの学校のイメージダウン。さらには弱体化できるかも、ってメリットがある」

「むむ…」

「更に、藤ヶ丘にもメリットはある」

「藤ヶ丘にとっては、不良を他校に押し付けられる上に、もし成功したなら優秀な生徒が劣せずして手に入るってわけさね」

「代わりにこっちはメリットなんてありゃしない。不平等過ぎて逆に笑えてくるさね」

言葉とは裏腹に学園長の顔には怒りが浮かんでいる。

鉄人はその説明にしばらく唖ってから、

「しかし…ならばなおさら、何故このような計画を了承したの？」

「そこがあの女の悪質な所さー！」

学園長は吐き捨てるように言って先程の書類を机に叩きつけた。

「断れば、『文月学園には不良学生を更正させるだけの能力が無い』と世間に思われてしまう…これはうちにとって、かなりのイメージダウンだろう?。」

「…ですな…あの方ならそれくらいの風聞を流すなど、造作もないでしょうな」

「たくつ！腹立たしいったらないね！！全てあの化け狸の手の平の上だったのかい!？」

「むう…何とかならんのですか?。」

鉄人も眉間にしわを寄せて言う。

が、

「無理だね。一応、『前向きに検討したいが、実例がない為、即答は出来ない』と言ってはみたがね…そしたらコレさ」

学園長はそう言って机の上の書類を人差し指でトントンと叩く。

「『テストケースとして一人そつちに送るから検討よろしく』って
ところかね…手回しが速いことだね、まったく…」

「……………」

あまりの悪質さに鉄人も絶句している。

その様子にまた一つため息をついて、学園長は椅子に深く座り直す。

「とりあえず…そういうことさ。クラス編成のテストやらの対応に
ついては頼んだよ」

「…むう…わかりました。では、私はこれで。失礼しました」

「ん」

鉄人は神妙な顔で一礼して部屋を出て行った。

一人残った学園長は目の前の書類…それに載った写真に目を移す。

「さてさて…よりもよって『この娘』とは…」

学園長の視線の先の写真では相変わらず少女が鋭い目つきでこちらを睨みつけている。

その制服の胸には名札が写っている。

『坂上 葵』

「…どつなるとやら…」

学園長はそう呟いて、また一つ大きなため息をついたのだった…

プロローグ（後書き）

こんな感じですよ。

…かなり無理矢理だったかな？

ご指摘、ご感想などいただけたら幸いです。

できたら次も読んでやってくださいませ。

第一問（前書き）

第一話です。

ようやく主人公登場…（苦笑）

注意！！この話には暴力的主人公が登場します！！

それでも良い方は本編へどうぞ。

第一問

アタシが高校生になってから二度目の春が訪れた。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為か、桜が咲き誇っている。

確かにその幻想的な眺めには一瞬目を奪われた。

だが、それも一瞬のこと。

アタシの頭にあるのはこの訳のわからねえ状況に対しての苛立ちで一杯になっていた。

「チツ…くっだらねえ」

そう呟いてアタシは見知らぬ学校の敷地に足を踏み入れた。

.....

「坂上、遅刻だぞ」

玄関の前で聞き覚えのある暑苦しい声に呼び止められる。

「……………」

だが、そんなことは関係ない。

アタシは声を見殺して歩き続ける。

だが、すぐに足を止めなくてはならなくなった。

さっきの声の主がアタシの前に立ちはだかったからだ。

「坂上、遅刻だと言っている。それに挨拶をしろ」

アタシはウザさに顔をしかめながら目の前の男を睨みつける。

そこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男が腕を組んで立っていた。

このオッサンには見覚えがある…『クラス分けテスト』とかいうヤツの時に見た顔だ…

確か…西村とかって名前だったか……

…面倒だ。オッサンでいいや。

アタシは仮称・オッサンを睨みつけながらもそれとなく観察する。

何をやってるから知らないが、見ただけでその肉体がかなり鍛え込まれていることがわかる。

だが、そんなことは今は重要じゃない。

今、重要なこと…それは…

「知るか。邪魔だ。どけ」

このオッサンがアタシの進行路を塞いでいて激しく通行の邪魔であるというその事実だけだ。

「…目上の人に対しての口の聞き方も教えなくてはイカンようだな…」

アタシの極上の挨拶が随分とお気に召したようで、オッサンは大き

なため息をつきながら何かぶつぶつ言っている。

そうかそうか、そんなにアタシの挨拶が気に入ったか。

じゃあ、その満足感を胸に一秒でも早く消え失せてくれ。

そうすりゃ、地球の温暖化も少しは改善されんだろうよ。

アタシの切なる願いも空しく、目の前の体感温度を二度は引き上げる物体は消えてくれない。

「まあ、それは後だ…遅刻だ、坂上」

それどころか話しかけてきやがる始末…

アタシは仕方なく、会話を続けることにした。

「うるせえよ…だいたい何の用でアタシにしつこく絡んでくんだよ、ウザってえ…」

「そういつところに理由が有るのだが…まあ、良い。あまり時間も無いしな」

オッサンは気を取り直すように一ツ咳ばらいをしたかと思うと背広から封筒を取り出し、差し出してくる。

宛名の欄には『坂上 葵』：アタシの名前が大きく書いてあった。

「ほら、受け取れ」

「ああ？何だ、ソレ」

「クラス編成の発表だ。お前は今日から一年間、そのクラスで過ごすことになる。良く確認しておくことだ」

「ふん…」

オッサンから封筒を受け取り、ビリビリと破って中に入っていた紙を確認する。

『坂上 葵…Fクラス』

そんな文字がデカデカと書かれていた。

なるほど…これがアタシがほつり込まれるクラスってわけだ。

『Fクラス』って言うと、確か…

「Fクラスはこの学校での最低クラスだな」

そうだった。

この学校じゃあ生徒を成績順で良い奴からAからFまでのクラスに
区分けしていくらしい。

つまりはアタシを含めたFクラスはこの学校の最低辺にいる連中の
集まりというわけだ。

「あっそ」

だがそんなことはある程度予想出来てることだ。

中学の頃から勉強そつちのけで暴れ回ってた身だ。

それを考えれば当然の結果だろう。

しかし…

「『あつそ』ではないだろう。藤ヶ丘ではどうか知らないが、今日からはお前も文月学園の生徒と同じなんだ。少しは気にしたらどうだ」

オッサンはアタシの反応が気に入らなかつたらしい。

何か説教じみたことを語り始めやがった…

…ああ…ウザりたい…

どうにかしてこの口煩い筋肉達磨を黙らせられないだろうか…

いや、そんな必要もない。

さっさと通り過ぎちまえればいいんだ。

そう思い、オッサンを無視して校舎を目指して歩みを再開する。

と、

「おい、坂上。聞いているのか？」

オッサンが制止の声をあげ、ゴツい手で肩に触れてきた。

その瞬間、

頭の中が真っ白になって、

気が付いたら、

ドガッ！！

「ぬおっ！？」

オッサンが困惑と驚きが入り混じったような声を出してうずくまる。

チツ…威力が足りなかったか…

アタシは振り上げた脚を下ろし、うずくまるオッサンを睨みつける。

「…触んな…ぶっ殺すぞ…」

アタシは沸き上がる感情を抑えながら、殺気だった声を出す。

怒りを声にして吐き出しながら頭では脚に残った感触を確かめる。

いきなりなことでも少し威力が足りなかったが、腹のド真ん中にヒッ
トしたのは確実だ。

今までの経験からして、コレを喰らって立ち上がった奴はいない。

…はずだった…

「…登校早々、教師の腹に振り向きざまの蹴りとはな…」

「ッ!？」

今度はアタシが驚く番だった。

オッサンは何事もなかったようにケロッとした表情で立ち上がったのだ！

ありえねえ！

アレを喰らって、普通に立ち上がるなんざ、普通の人間が出来るとは思えない…

何だ、このオッサン！？化け物か！？

「確かに、中々の威力だったが…まだまだだな」

身構えるアタシを尻目にオッサンは悠々と立ち上がり、服についた土を掃っている。

「だが…ほぼ面識の無い…しかも目上の相手にいきなり手を上げるなど、言語道断…！」

そう叫ぶとオッサンは準備運動のように首をコキコキと鳴らすと、アタシを睨みつける。

「お前には挨拶の仕方からみっちり、指導してやる…覚悟しろ？」

「…上等っ…！」

やれるもんならやってみやがれ！！

そう叫んで、脚に力を込め、目の前のオッサンに…否、人外に向かって飛び掛かった！！

第一問（後書き）

こんな感じですよ。

主人公、口悪いなあ（笑）

不快に思った方、すいませんでした。

では、葵ちゃんと鉄人の死闘の結果は次回に。

できたら次も読んでやってくださいませ。

第二問（前書き）

問 『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点：マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点』

『合金の例：ジェラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点：ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例…未来合金（ すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

坂上葵の答え

『問題点…重量が軽いと武器として使用出来ない為』

教師のコメント

調理に使ってください。

第二問

「痛う〜…畜生…アイツほんとに人間か？最新鋭の機械兵器とかじやねえのか？」

そうばやきながら節々が痛む身体を引きずり、廊下を歩く。

あの死闘からなんとか撤退した後、仮称・オツサン型機械兵器の執拗な搜索をかい潜りようやくここまでやって来たのだ。

それにしても恐ろしい相手だった…

延髄に二、三発、渾身の蹴りをお見舞いしてやった直後に平然としている様子を見た時はさすがのアタシも背筋が寒くなった…

あんなのが一教師でしかねえってのが信じられねえ…

文月学園…どんな人外魔境だったんだ！？

そんな想像に一人、背筋を寒くしていると、

「皆さん進級おめでとうございます」

「っ!？」

いきなり聞こえた声に思わず、その場で跳んでしまった…

だ、誰だ!？あの化け物が追いついてきたのか!？

「私はこの二年A組の担任、高橋洋子です。よろしくお願いします」

そんなアタシを置き去りに声は続いている。

よくよく聞いてみれば声は廊下ではなく、壁の向こう…つまりは教室の中からしている。

な、何だ…驚かせやがって…

ぐ、ぐつにビビったわけじゃねえ!

ただいきなりのことに身体が無意識に反応しちまったただけのこと…
…て、誰に言い訳してんだ、アタシは…

気を取り直しがてら、足を止めて学校の教室にしてはでかい窓から中を覗いてみる。

教室の一番前には髪を後ろで団子状にしてまとめて眼鏡をかけ、スーツをきっちり着こなした女がいた。

あれがこのクラスの担任なんだろう……いかにも真面目で堅物そうな奴。アタシの苦手なタイプの人種だ……

その堅物女がなぜか壁全体を覆うような大きさのプラズマディスプレイの前に立っている……

何だ、こりゃ？

注意深く見回してみれば、有るわ有るわ、高級そうな設備の数々……ほんとに教室か、コレ？

「設備に不備のある人はいますか？……どうやら、いないようですね」

堅物女が設備の確認をしているのを横目に物珍しさに覗きを続行す

る。

と、

「では、はじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください」

「……はい」

堅物女に名前を呼ばれ、前に出て来たのは、黒髪を肩まで伸ばした日本人形みたいに無表情な少女。

「……霧島翔子です。よろしくお願いします」

少女は淡々と名前を告げる。

「……………ハッ!？」

しまった…少し見入ってしまった…

だが! 勘違いされないように言っとくが、アタシは別にそっちの

気はない。

あくまでノーマル…って、だから！アタシは誰に言い訳してんだってえの！

とにかく！ 少女は同性のアタシから見てもかなりの美少女ってことだ。

と、そんな一人コントを繰り返している間に日本人形的美少女は自分の席に戻り、教室の前ではまた、堅物女が説明を続けていた。

「Aクラスの皆さん。これからの一年間、霧島さんを代表にして協力し合い、研鑽を重ねてください」

フム…どうやら、担任の挨拶も終盤らしい。

覗きはこれくらいにして、さっさと自分のクラスに行こう。

そう考え、窓から離れようとした瞬間、

「これから始まる『戦争』で、どこにも負けないように」

ピタっと。

アタシは動きを止めた。

「『戦争』だあ？」

およそ学校という場所にはそぐわない言葉。

だが、堅物女は確かに言った、『戦争』と…

どういうことだ？何かの隠語か何かか？

そう思って知ってる限りの隠語を思い返してみるが、全くわからない…

「チツ…こんなことになるんなら説明を受けた時、もっとしつかり聞いとくべきだったぜ…」

説明担当者が説教じみた言葉と一緒に話してたから、いちいち聞いてらねえと思って聞き流してたのが今じゃ悔やまれる。

仕方ないので、普段はあまり使わない頭をフル回転させて考えるが、案の定、不発。

「だあ〜！くっそ！どっいうことだ！？まさか本当に戦争するわけでもあるまいし〜！」

と、そこまで言った後、

「…待てよ？」

アタシの頭に今世紀最大のひらめき！

「…なるほどな…そういうこと、か」

そう呟いて一人ほくそ笑む。

『戦争』…この言葉は隠語でもなんでもない。そのまんまの意味なのだ。

つまりは他のクラスと血で血を洗う抗争を繰り広げ、生き残った奴がこの学園の覇権を握る…そんな漫画かゲームでしか無いようなことを学校全体で容認しているわけだ。

そう考えればさっきの化け物教師の存在も納得だ。

アイツはつまり、ココの生徒が暴走した時のために用意された肅正用兵器ってわけだ。

この学校の核心をついたに違いない答えを導き出したアタシは額の汗を拭う。

「ふう。危ねえ危ねえ…知らずに自分の教室に行ってたら真っ先に餌食にされてたところだぜ」

そう言いながら、目の前の教室を覗く。

アタシの想像どおりならさっきの堅物女も、日本人形的美少女も、クラスの連中も、かなりの実力者ということになる。

皆、およそそうは見えない容姿をしていて騙されるところだった。

だが…！甘いな、文月学園！

漫画やゲームでしか無いような環境に居るのが自分達だけだと思っ

たら大間違いだ！

アタシはニヤリと笑みを浮かべながら、藤ヶ丘での日々を思いをはせる。

割れた窓ガラス…

振るわれる数々の凶器…

響く爆音と断末魔…

ああ、懐かしの学校せんがくの光景…

…とと。そんなに昔のことでもないのにノスタルジックな気分になっってしまった。

もっとしつかりしてねえと…

襲撃者には待った無しだぜ？

「さて…そうと分かりゃこんなトコで時間を潰してるわけにはいかねえな」

アタシはそう言いながらもゆっくりと自分の教室に向かって廊下を
進んでいった。

来たるべき闘いの時に備え、身体と心の準備を整えながら…

第二問（後書き）

こんな感じですよ。

またまた無理矢理だったか…？

こんな主人公ですが、よろしくお願ひします。

できたら次も読んでやってくださいませ。

第三問（前書き）

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『（１）得意なことでも失敗してしまうこと』

『（２）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

『（１）弘法も筆の誤り』

『（２）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（１）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

坂上葵の答え

『（２）踏んだり蹴ったり』

教師のコメント

正解ですが…坂上さんが使つと別の意味に聞こえてしまうのは私だけでしょうか。

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2) 泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

第三問

〈明久Side〉

「…です。一年間よろしくお願いします」

そう言ってまた一人、自己紹介を終えたクラスメイトの一人が席についた。

自己紹介ももう終わりの方。

前半にはムツツリーニや秀吉、島田さんなどの知り合いの顔もあったけど、ここしばらくは目新しいこともなく、名前を告げるだけの単調な作業が続いてる。

この退屈な時間を過ごしてわかったことは、このクラスには秀吉しか女子がいないという事実…空しいね…

「ふあ」

そんなわけでいい加減、眠くなってきた…

思わず大きな欠伸をしてしまった。

「これから、吉井君。クラスの仲間の自己紹介はしっかりと聞きましょうね」

そのせいで、担任の福原先生に注意されてしまった。

「あ…:すいませ」

ズガンツ！！ バキイツ！！

突如、先生の真横で教室のドアが爆発した。

「「「「「「は？」「」「」「」

クラス中の思考が停止する中、枠から外れて宙を舞った元・教室の扉は、

「あれ？」

そのまま、黒板の前に立っていた福原先生へ飛んでいき、

そして…

ガッシャーンッ！！！

そのまますっ飛び、窓ガラスを突き破ぶって落ちていった。

『……………』

一気に風通しが良くなった教室で、僕を含めたクラスメイト達は突然の惨劇に声も出せずに固まっていた。

しかし、少しずつ状況を理解し始めて…

『せ、せんせえー！ーッ！？』

一斉に叫ぶ。

なんてこった！一年の始まりにいきなり担任がいなくなってしまうた！

「ふう。危ないところでしたね」

『つて、ええええーっ！？』

と思ったら普通にボロボロの教卓の下からひょっこりと顔を出した！

まさかの事態に思わず叫んでしまったけど、とにかく良かった！

突然の惨劇と担任のいない一年間という未来は回避された。

僕が心から先生の無事を祝福していると…

「何だ。避けやがったか。運の良い野郎だな」

耳慣れない声が爆心地…元・扉の向こうからした。

クラス全員の視線が集まる。

「ふん…まあいいさ。後でキッチリ仕留めれば問題ねえしな」

ようやく晴れてきた埃の中には一人の少女が立っていた。

金色をしたショートカットの髪…

少しツリ目がちで力の籠った黒い瞳…

健康的に日焼けした肌…

全体的にどことなくチーターを思わせるスラツと長い身体は別の学校の制服だろうか、黒いセーラー服を身につけている。

『おい…誰だ、あの娘？』

『知らねえよ…ただ…』

『…可愛いよな』

『ああ、可愛い』

『全くもって可愛い』

Fクラスの野郎共がざわつき始めている。

実際、突然現れた少女は整った顔立ちをしていた。

女の子にしては高い身長も相まって、可愛いというよりも綺麗という印象を受けるかもしれない。

そんな少女はしばらく無言で僕らを見回したかと思つと…

「んで？誰から潰してほしい？」

『へっ。』

そんな一言で僕らを混乱の渦に再度叩きこんだのだった。

第三問（後書き）

ちよつと短めで。

明久の口調など、間違つてたらご指摘頂けたら幸いです。

できたら次も読んでやってくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1999ba/>

バカと不良の交遊録

2012年1月6日10時50分発行